

C O N C E P T B O O K

S U A C

D R I P

S T O R Y

わたしの
世界を
かえたこと



Drip
#001

インドネシアから浜松へ。
私の「ルーツ」が、
社会を変える鍵になる。

小学3年生の時、私の人生は一変した。両親の仕事の関係で母国インドネシアを離れ、三重県へとやってきたのだ。当時の私には日本語の知識など全くなかったが、いきなり地域の小学校の普通クラスに放り込まれた。

周囲に同じルーツを持つ知り合いもいらず、「日本のみんなと関わっていくしかない」という逃げ場のない状況。言葉が通じないもどかしさや、差別的な視線に晒されることもあったが、

私はそれを決して「悲しい経験」だけで終わらせたくはなかった。必死に馴染もうと模索し、一つひとつ言葉を自分のものにしていったあの時期の葛藤が、今の私の強さと前向きな性格を形作ってくれたのだと思う。

「自分のルーツを活かして、誰もが暮らしやすい社会を作りたい」。その想いが明確になったのは、高校2年生の冬だった。世界史の授業で多様な文化が交差する面白さに目覚めると同時に、日本で暮らす外国人の一人として、多文化共生というテーマに人生を懸けてみたいと考えるようになった。

た。進学先としてSUACを選んだのは、必然だった。先生の勧めもあったが、何より浜松という街の存在が大きかった。初めて浜松駅に降り立った時の衝撃は今でも覚えている。駅を歩けば、当たり前のように様々な国籍の人たちが日常的に行き交っている。不安どころか「ここでなら、多文化共生のリアルが学べる」とワクワクが止まらなかった。

実際に入学してみると、キャンパスには多様な背景を持つ仲間や留学生が驚くほどたくさんいた。彼らと日常的に交流することそのものが、私にとつての多文化共生の実践になった。ゼミでは佐伯康考先生のもと、多文化共生と「国際労働力移動論」を専門に学んでいる。このテーマを選んだ背景には、長年日本で外国人労働者として働いてきた父の姿がある。父がどれほどの苦勞を重ねて家族を支えてくれたか間近で見てきたからこそ、今度は私が、労働者と企業をより良い条件で繋げる架け橋になりたいと考えたのだ。学びを深めるうちに、労働

者本人だけでなく、その家族や子供たちの教育支援の重要性にも辿り着いた。かつて言葉の壁にぶつかり、孤独を感じた自分だからこそ、共に未来を拓く方法を提示できるはずだ。そんな使命感が、今の私の研究を支えている。

3年生の時、大きなプロジェクトに挑戦した。静岡県庁の依頼で、「静岡県多文化共生月間」の公式ポスターをゼミで制作することになったのだ。私はリーダーとしてゼミ生をまとめ、議論を重ねた。大切にしたのは、単なる相互理解に留まらないその先の価値を提示すること。辿り着いたコンセプトは「鍵と扉」だ。一人ひとりが持つ「鍵」で、新しい社会の扉を共に開けていこうというメッセージを込めた。自分たちの活動がポスターという形になり、社会へ放たれるプロセスで得た達成感は、私にとって大きな自信へと繋がった。

卒業後の進路については、今、真剣に悩んでいる。企業で実務経験を積むか、あるいは大学院に進学して研究を

LA ADITYA RAHMAT
PANDEWA

文化政策学部
国際文化学科3年



深化させるか。どちらの道を選んで
も、軸は変わらない。「自分のルーツ
を活かし、多様な人が自分らしく輝
ける社会を作る」ことだ。SUACで
の3年間を振り返って思うのは、ここ
は主体性さえあれば、どんな願いも
実現可能にしてくれる場所だというこ
と。SUACで過ごした時間が、私の
ルーツを唯一無二の力へと昇華させて
くれた。



Drrip
#002

空間の
「心地よさ」を、
論理で設計する。



はじめは「デザイン」という選択肢は、
私の将来になかった。きっかけは、受
験勉強のために通っていたカフェの内装

半年間経験したフランスへの交換留学
だ。現地の大学で目にしたのは、日
本とは全く異なる学生たちの熱量だっ

すぎず、空間の使われ方を論理的に
突き詰める。この視点は卒業制作に
も反映されている。閉塞的な都市の

空間に、言葉にできない心地よさを感じたことだ。「自分もこんな空間を作りたい」。その直感に従い、数学受験が可能で、複数のデザイン領域を横断して学べるSUAへの進学を決めた。

入学当初は建築を中心に学ぶつもりだったが、領域を越えて学べる環境は私の好奇心を刺激した。建築に加えグラフィックやパッケージデザインにも挑戦し、コンペで入賞した経験は、建築を視覚情報や使い勝手を含めた広い視野で捉えるきっかけとなった。この柔軟な学びは、後に自分の強みとなる大きな引き出しになった。

大きな転換点は、2年次の後期から

た。働いて資金を貯めてから入学してくる学生も多く、彼らは「ただ単位を取る」ためではなく、その先の未来を見据えて能動的に学んでいた。さらに衝撃を受けたのは、デザインとアートを明確に切り分ける考え方だ。自己表現としての「アート」に対し、徹底的に使い手の利便性や論理性を追求する「デザイン」。言葉の壁や文化の違いに戸惑い、一人で生活を切り拓くなかで培った精神的なタフさと共に、この「顧客目線の設計」という視点は、私のデザインの確固たる核となった。

帰国後、その感覚は大学の理論と結びつき、さらに深まった。自分を出し

集合住宅に対し、私は住民や近隣の人々が利用できる「市民農園」を導入する設計を提案した。共に作物を育てる能動的な行為が、コミュニティを形成するきっかけになると信じているからだ。膨大な図面や模型制作を伴う学びは過酷だが、同じ苦労を分担する仲間との絆は、何物にも代えがたい財産となった。

学びの成果は学外でも発揮した。碧風祭では領域の異なる友人と協力し、得意分野を分担して店を運営。デザインが実利を生む喜びを実感した。また、アルバイト先のカフェで自作の水彩画を飾った縁から、商品ディスプレイなどの販促デザインを任されるようにもなった。授業で得た知識を能動的にアウトプットすることで、初めてデザインの本当の価値が体感できるのだと学んだ。

卒業後は大学院へ進学する。培った建築の知識をベースに、今後は建物の内側を彩るインテリアやディスプレイの分野を追究したい。空間デザイン一つで人々の行動は劇的に変わる。そんな責任ある仕事を通じて日常を豊かにしたい。大学での4年間は、学びたい意志があれば好きなことを突き詰められる貴重な時間だ。大学という場所をいい意味で利用し、能動的に動き続けることで、自分の世界はどこまでも広がっていく。





酒
向
悠
斗

デザイン学部
デザイン学科4年



Drip
#003

迷ったら、挑戦する。
四国の山奥で、
本当の豊かさを知った。



地元・浜松で公務員として地域に貢献したい。そんな目標を抱いてSUACに進んだ私の毎日は、当初、とても静かなものだった。行政や政策の授業には熱心に取り組んでいたが、自分から何かを始める勇気が持てなかったのだ。ボランティア募集を見かけても「私に務まるだろうか」と不安になり、一歩引いてしまう。そんな狭い世界にいたのが、1年生の頃の私だった。

転機は2年生の夏。「何もしないまま卒業していいのか」という焦りに突き動かされ、愛媛県西条市での村おこしボランティアに申し込んだ。単身で四国の山奥へ向かう決断は、当時の私には考えられないほど大きな一歩だった。限界集落での10日間は、想像を超える経験の連続だった。初対面の大学生との共同生活や過酷な肉体労働。スマホを手放して自然のなかで汗を流



し、みんなで囲む食事。そんな当たり前のことが、これほど心を豊かにしてくれるのかと衝撃を受けた。何より私を支えたのは、よそ者の私を「いつでも帰っておいで」と迎えてくれた地域の人々の温かさだ。地域活性化の核にあるのは、人と人の心の繋がりのだと身をもって知ることができた。

この経験を経て、私の中にあった「失敗を恐れる心」は消えた。やらずに悔やむより、やって後悔するほうがいい。以前なら尻込みしていた場所にも、今では自分の直感に従って飛び込めるようになった。周囲からも「たくましくなった」と言われ、自分でも決断力がついたことを実感している。

現在の活動は、棚田保全に取り組む「引佐耕作隊」や少年自然の家でのスタッフなど多岐にわたる。活動の幅を広げるなかで気づいたのは、まちづくりは一方的な思いの押し付けであってはならないということだ。地域の人々が何を望んでいるのか。その声に耳を傾け、対話を重ねるプロセスを何より大切にしたい。この視点は、授業で学んだ「関係人口」という概念と、西条市での実体験が結びついたからこそ持てたものだ。現在は田中ゼミに所属し、学生主体のプロジェクトとして「浜松市関係人口ポータルサイト」の提案に取り組んで





いる。西条市で学んだ「相手の立場に立つ」姿勢を意識しながら、人手を必要としている農家や団体と、地域活動に参加したい人を繋ぐパイプ役を形にしようと、チームで議論を重ねている。将来は公務員として、特に子どもたちが地域に愛着を持てる環境を整えていきたい。そのために、私自身も挑戦することを止めず、常に「わくわく」を追い求めていくつもりだ。今月、私は再び

西条市に向かう。訪れるのは4回目。私にとって大切な原点であり、人生を変えてくれた場所に「帰る」ような、暗れやかな気持ちで。

夏
目
花
鈴

文化政策学部
文化政策学科3年

※学生情報は、取材時（2025年度）のものです。



静岡文化芸術大学
SHIZUOKA UNIVERSITY
OF ART AND CULTURE